2110　離島覚書（長崎県島山島）

万関展望台より島山島を望む

浅茅パールブリッジ

対馬は地峡部に人工的につくられた水路（万関橋）を境に上島と下島に分かれるが、この間に広がるリアス式の湾が浅茅湾である。浅茅湾には大小 61 の島があり、島山島はそのうちの１つで、湾中央部に位置する唯一の有人島だ。

島の面積は 4.70 ㎢と対馬の有人属島の中では最も大きい。地盤の沈降によってできた多数の溺れ谷が複雑に入り込むリアス式海岸が続き、このため海岸線の総延長は 45.0 ㎞に及ぶ。

島山島という名称の島は五島列島の福江島の西側にもあるので、ややっこしい。五島の島山島も深い山が連なり、シカが生息する島として知られている。

国道 382 号を玉調の集落で左折して島山島に向かう。1988 年から農道がつくられ、島山島に通じており、この農道は「浅茅パールライン」と呼ばれている。山を切り開いてつくられたのだが、途中に農地はないし、人家もない。

本島と島山島の間は 50mほどの狭い瀬戸で隔てられている。この瀬戸に「浅茅パールブリッジ」と呼ばれる橋が架かっている。パールラインやパールブリッジと、パールを冠するのは後述するようにこの湾内で真珠養殖が盛んだったことに由来する。

橋がない時代、島民は船で本島の樽ヶ浜に買い物に行き、子どもたちは通学していたが、不便なことから本島を結ぶ橋の建設が望まれていた。この橋は 1994 年に完成し、車で自由に本島に出かけることができるようになった。橋の長さは 124m、幅員は 4.75m（車道部分は４ｍ）で歩道もつけられている。橋の入口には干拓地の水門として使われていた大きな平たい石が先人の偉業を後世に伝え残すために置かれていた。この島で産出された「島山石」という特殊な平板の石である。

島の道路は尾根筋を切り開いてつくられており、氏神鼻と恵比須鼻の間の入り江にある

唯一の集落まで続いている。途中に比較的新しい家があったが、どうやら最近移住してきた人のようだ。そこから先端の集落まで家はない。島山島はスケルトンアイランド（骸骨島）と呼ばれ、肋骨のようにたくさんの骨が突き出た形をしているが、集落から先の島の半分は道路もなく、手つかずの原生林が続いている。

集落への坂を下る途中に島左近の墓と書かれた看板がたっていた。島左近（島清興（きよおき））とは石田三成の側近で、関ヶ原の合戦で戦死したことになっている人物である。京都の立本寺に墓があるというから、なぜ島山島に左近の墓があるのか不明だが、美津島町誌によると、「朝鮮御陣（秀吉の朝鮮出兵）で討死した島左近の墓が同名の石田の謀将島左近と誤り伝えられたものであろう」としている。[1] 墓まで行くには道路から５分ほど山道を登らなければならない。ちょうど小雨が降っていたことからぬかる山道を歩くのは避けたく、現場まで行かなかった。

島山島に至る農道（左）、浅茅パールブリッジ（右）

９戸の集落

坂を下るとＶ字型をした入り江の奥に出た。Ｖ字の両側に人家が１列に並んで集落を形成している。家の背後は山が迫り、道路を隔てて海が迫る。つまり平地はほとんどない。

自動車が５～６台ほど停まれそうな広場があり、その一角に島山通学バス待合所と書かれたバス停が置かれていた。2015 年国勢調査時の島山島の人口は 31 人、世帯数は 12 戸。途中に移住者らしき人の家があったのでこれを差っ引くと、この浜の集落は 11 戸ということになる。年少人口は２人であったからこの集落には子どもがおり、このバス停は実際に使われているのかもしれない。

山際には墓石が並んでいた。大浦姓が３基、小田２基、荒川１基、小島１基、栗屋１基の合計８基である。少し離れたところにもう１基あった。この集落で最も古い家が大浦家だという。墓誌に書かれていた最も古い人の死亡年は文化 13 年（1816 年）だったので、江戸後期ということになる。つまり、ここに人が住み始めたのは 18 世紀後半と推定される。

後述する小島対司さんによると、島山島の先祖は本島の大山（おやま）から移住してきたようだという。美津島町誌によると、島山島の元々の世帯数は 12 戸で、1964 年までに分家１戸、寄留１戸が増え、明治初年とほとんど変わっていないのに対し、同じ町内の犬吠、賀谷、昼ケ浦、玉調べなどは漁家戸数が増加し、集落の人口が大幅に増えている。これに対し島

山は漁業戸数が増えず、農業に依存していたから農地の制約上分家が増えなかったとしている。なぜ島山で漁業が増えなかったのかと疑問を呈している。

1977 年当時、島山の世帯数は 13 戸、人口は 61 人で、このうち９戸が農林業で、漁業は２戸にすぎなかった。漁業が中心であれば、分家は増えたのだろうが、農業を中心としていると、土地に限定されるため、人口を増やすことはできない。

附近を歩いていた女性に現在実際に住んでいる世帯数を聞くと９戸だという。国勢調査時よりも減っている。実際にいくつかの空き家も確認できた。

もともと山際の狭隘な土地に家が並び、農地は山の上にあったものと推定される。海岸沿いの護岸は 1977 と 1978 年度に整備され、一応、自動車が何とか通れそうな幅員の道ができている。この護岸整備の時に、各家の前にコンクリート製のガンギ（階段）が整備され、ここに自家用の船を係留したようだ。なお、この入り江は漁港でも港湾でもなく、建設海岸に位置付けられている。奥まったところに沈船が３～４隻放置され、実際に使われていると思われる船は１隻しか確認できなかった。

集落の東のはずれに造船場の残骸が放置されていた。一昨年の台風で破損したまま放棄されたもので、以前はここでＦＲＰ船が作られていたという。経営者は別の場所で造船場を営んでいるとのことだ。

各家の前に整備されたガンギ（左）、島山島の集落の全景（右）

島山石

対馬空港の駐車場の近くに石で屋根を葺いた建物が置かれている。この石屋根の小屋は対馬の伝統的建築物であった。江戸時代、瓦の使用が制限されていたため、防火防風の観点から対馬に産する平板上の石が小屋の屋根に使われていた。現在でも対馬南部の椎根集落に５～６棟残っている。集落の中にも以前採掘されたと思われる平板状の石が積み置かれていた。また、橋の手前に水門に使われた石板が置いてあることはすでに述べた通りである。

対馬の地質は大部分が第３紀の海成層（堆積岩）からなる対州層群で構成され、島山島周辺にはその中部層が露出する。[2)]

島山島はこの良質の頁岩（けつがん）が分布し、しかも海岸付近に露出していた。採取が容易でしかも当時は団平船と呼ばれる底が平らな船で運ばれたので、運搬に便利な立地条件にあったことが、島山島での産地化を促したものと思われる。

島には石工はおらず、採石のノウハウもなかったので、島根県から石見銀山の石工（後述する神社の奉寄進碑の人）や五島から有江さんという石工がやってきて指導したらしい。採石は大浦家と小島家が中心で、後述する小島家では祖父、父親の２代にわたって石屋を営んでいた。大正時代に黒色火薬を使用した発破の技術が導入されると、生産量は飛躍的に増大したという。

しかし屋根用の平板石の採取は昭和の初めごろに終了（需要がなくなった）、その後、墓石や間知石の用途向け採石が昭和 40 年代まで続いたが、やがて島山石の採石は終焉を迎えることになった。

採石業に代わって登場したのが真珠養殖であった。対馬における真珠養殖の歴史は古く、1921（大正 10）年に北村幸一郎によって導入され、戦後の漁業制度改革が行われるまで北村１社による独占状態が続いた。戦後、漁業改革により地元漁業者が参入すると浅茅湾を中心に急速に発達し、最盛期の生産額は 73.4 億円に達して対馬の重要な地場産業になった。しかし 1996 年に発生したアコヤガイの赤変病の蔓延で多大な被害を受け、真珠養殖からの撤退が相次いだ。

集落内の積まれていた島山石（左）、椎根集落に今も残る島山石で葺いた穀物倉庫（右）

漁師は２人

集落の海岸沿いの道路を歩いていると、盆栽の手入れをしている人に会った。小島対司さんといい、本職の漁師だった。少し雨が強くなってきたので、軒下に入って話を聞いた。ちなみに盆栽の松は黒松で島の山で採ってきたものらしい。見事な盆栽である。

小島さんの家は上述したように２代続いて採石業を営んでいたが、その後、真珠の母貝養殖に転換した。母貝の種苗は島外から購入し、浅茅湾内で養殖して真珠養殖業者に販売した。当時、島山島の約８割の家が真珠養殖を営んでおり、この島は真珠に成り立っていたという。多分、農業から真珠養殖に転換したのだろう。養殖業は農業に似ているから転換はそれほど苦にならなかったに違いない。また浅茅湾を抱える美津島町は就業者の約２割が真珠関連業者であった。

しかし上述したように 1990 年代に入って対馬の真珠養殖は壊滅的な打撃を受けた。力をもった人たちだけが生き残り、ほとんどの業者が真珠養殖から撤退した。島山島も例外ではなく全員が真珠養殖から撤退し、その後漁業に転換、あるいは高齢の者は無就業の状態になり、現在に至っている。

島山島の漁業者は美津島町西海漁協に属している（美津島町内には西海漁協の他に美津島町漁協、美津島高浜漁協の併せて３つの漁協があるが、高浜と西浦は比較的経営がよかったので合併には加わらなかったようだ)。漁協の事務所は本島の竹敷に置かれており、竹敷、昼ヶ浦、黒瀬の各地区の漁業者によって組織されている。島山島の組合員は正が２人、准が３人の合計５人である。小島さんはもちろん正組合員だ。

この漁協のメインはクロマグロの養殖で、2001 年から取り組んでいる。現在７経営体（地元の組合員のみで、島外の民間企業は入っていない）が営み、島山島と竹敷の間の海域には多数の生簀が設置されていた。クロマグロの出荷サイズは 40～50 kgだという。種苗は地元の漁師が曳釣りで釣ってきたものを買い入れており、単価は１尾あたり 5,000 円ほどで取引されている。

小島さんが営む漁業の周年サイクルを紹介しておこう。１～３月はナマコの桁曳網で、アオナマコが 90%を占める。４～６月が昼イカ釣り（ケンサキイカ、現地ではヤリイカと呼ぶ)、７～10 月は夜イカ釣りに代わる。10～12 月はヨコワの曳釣りになり、３～４kgサイズのものを鮮魚で出荷している。ヨコワの漁獲割当量は 500 kgに規制されているので商売にはならないらしい。

浮桟橋に係留されている小島さんの漁船（左)、小島さんとみごとな盆栽（右）

海祇神社

集落先端の氏神鼻に渡祇(わだつみ)神社がある。島の氏神様だ。イノシシが集落に侵入してくるのを防ぐため、神社に至る道路は鉄製のメッシュで遮られていたが、脇をすり抜けて岬の先端まで行った。

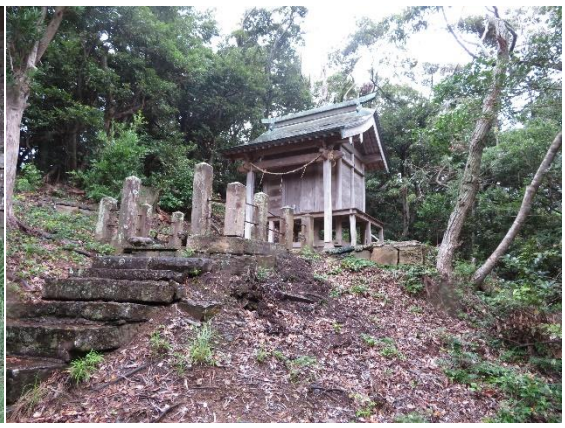
大浦家が寄進した石造りの鳥居をくぐり、階段を登る。もう一つ石づくりの鳥居があり、その先に拝殿が置かれていた。下の鳥居は大浦優さんが昭和 12 年に寄進したもの、上の鳥居は大浦伊吉さん（元治元年生まれ）が大正 14 年に寄進したものである。何れも島山石の採石を中心的に担った大浦家が建てたものであった。

拝殿の奥に本殿があった。周辺には「日露凱旋記念」やら「荒川秀作満州派遣隊、諸願為就之」などと書かれた戦争関連の石碑が目立つ。

階段を登る手前の草むらに「奉寄進、島根県邇摩郡大浦、市川〇〇、大正 15 年」と書かれた石碑が置かれていた。島山石の採掘には技術を必要としたので、石見銀山のある邇摩郡から石を採掘するためにやってきた人なのだろう。島山石の採掘は大正時代に盛んに

なるので、市川さんという石工の人がここで事業を始め、そして神社を寄進したものと思われる。この方は、戦後、郷里に引き揚げたそうだ。

小雨の中を集落入口に停めてきた車まで戻る。



島根の人の奉寄進の石碑（左）、海祇神社の本殿（右）

台地の農業

農道沿いに２ヶ所の農地を確認した。１ヶ所は大型のビニールハウスが８棟ほど並んでいたが、ビニールは壊れたままで放置されていた。以前何がつくられていたのかわからない。もう１ヶ所はトラックターが置かれ、これから何かを作付けする準備をしているように見える。農道から脇道が何ヶ所かあり、おそらくその先に農地があると思われるが、時間の関係もあり、確認できなかった。

島山島の農業の実態はよくわからないが、2015 年国勢調査の農業就業者は１人だけいた。ちなみに 1977 年の統計調査では、13 戸のうち農林就業世帯が９戸で、漁業の２戸よりも多かった。その後、真珠養殖が普及したので、農業から養殖業への転換が進んだものと推定される。

上述したように島山島は基本的に農業の島だった。小島さんの話では、近年、水産資源がめっきり減っており、これからは農業の方に希望が持てると話していた。

放置されたビニールハウス（左）、耕うんされた農地とトラックター（右）

【文献】

1)美津島町誌編集委員会（1978）：12.島山，美津島町誌，美津島町．175-177.

2)徳橋秀一（2008）：国境の島、対馬の対州層群を訪ねて.地質ニュース 645 号．26-52.